広島県病院薬剤師
交流研修事業報告

医療法人せのがわ　瀬野川病院
薬剤課　佐々木　知恵

患者様の立場に立った良質な医療サービスを目指します
いつでも、どこでも、だれでも
医療法人せのがわ

当院の紹介

- 広島県と広島市が指定する精神科救急医療センター
- 精神科救急情報センター（24時間対応）
- 応急入院指定病院
- 心神喪失者等医療観察法の指定通院機関
- 広島県依存症治療拠点機関
- 病棟・病床数　6病棟　312床
- 精神科救急病棟　2病棟　112床
- 精神科一般病棟　4病棟　200床
- デイケア・デイナイトケア・重度認知症デイケア
- 訪問看護事業所（広島市2、呉市1）
- 居宅介護支援事業所

【薬剤課構成】
薬剤師　5名　　アシスタント　3名

勤続年数　20年以上　薬剤師1名
10年以上　薬剤師2名・アシスタント2名
5年未満　薬剤師2名・アシスタント1名

交流研修の事前準備

出張薬剤師の決定

選出基準

- 勤続5年以上（当院のみの経験）
- 複数の委員会の経験
  （部署横断的業務経験あり）
- 精神科薬物療法認定薬剤師または同等以上の認定

「基幹病院」の情報事前収集

県立広島病院薬剤課を視察し

- 薬剤師業務の概要
- 業務関連のシステム化や機械の導入状況

  の確認

参加病院としての準備

- 提供する研修内容について資料を作成
- スケジュール策定

研修施設と研修期間

研修施設: 県立広島病院

研修期間: 2024年11月5日～11月29日

診療科：21診療科

- **病床数**: 712床（一般662床、精神科50床）
- **職員数**: 約1500人

県立広島病院施設概要

- **主な役割**: 高度医療の提供、救急医療、がん医療など

薬剤部門概要

- **常勤薬剤師**: 39名
- **業務内容**: 調剤、服薬指導、DI、治験支援
- **勤務体制**: 4週8休制、夜勤体制（来年から変更予定）

地域病院（当院）の主な研修目的

研修先での目的

- 病棟薬剤業務、チーム医療及び医師などからのタスク・シフティングの推進に必要なノウハウの習得
- 自施設とは異なる多様な症例を経験することによる薬剤師スキルの向上
- 対物業務の効率化及び対人業務の推進に必要なノウハウの習得

受け入れる側の目的

- 地域医療連携の推進
- 病棟薬剤業務、チーム医療及び医師などからのタスク・シフティングの充実
- 病院薬剤師の重要性の認識の醸成

研修先での具体的な目的

◆病棟薬剤業務推進に必要なノウハウを学ぶ
◆精神科患者の基幹病院（転院先）での治療を知り、連携を強化する
◆基礎疾患を持つ患者の妊娠期及び授乳期におけるかかわりを学ぶ
◆コロナ病棟での精神科患者の処方薬について学ぶ
◆セントラル業務の流れについて学ぶ
◆治験業務について学ぶ
◆チーム医療における薬剤師のかかわりについて学ぶ
◆薬学生実務実習について教育方法を学ぶ
◆基幹病院への貢献

交流研修内容

業務内容		研修期間	研修内容
調剤業務	内服調剤	2日	○調剤の業務フロー、薬剤師の代行修正、在庫管理の方法について ●処方監査及びピッキング
	注射調剤	2日	○返品薬（不使用薬剤の扱い）について ●処方監査及びピッキング
PFM	入院前持参薬確認	1日	○周術期における薬学的管理評価（周術期薬剤管理加算）、中止薬剤について ●マニュアルに沿って手術予定患者の入院前の服用薬の聞き取り、カルテ入力
腫瘍科	見学	半日	○抗がん剤調剤の流れ、抗がん剤の調整、抗がん剤のレジメンについて ●外来患者服薬指導の見学、がんゲノム検査カンファレンスへ参加

○県立広島病院薬剤師より説明　　●実践的に研修した内容

業務内容		研修期間	研修内容
手術室	薬剤の補充、麻薬管理、カルテチェック、テンプレート入力	1日	○手術使用薬剤の準備、麻薬の管理、配置使用薬品の集計について ●薬剤補充、翌日手術患者のアレルギーおよび使用薬剤のチェック、マニュアルに準じてテンプレートの入力
DI業務	業務内容説明	半日ずつ２回	○DI業務とシステム管理、マスターメンテナンス、電子カルテ検索機能、後発品採用時の基準、緊急購入医薬品、自費薬剤の申請・購入のフロー、適応外使用薬剤の審査、学生実習の評価について
病棟業務		各部門（14病棟）半日ずつ 精神科病棟は2回	○県立広島病院の概要、病棟薬剤業務実施加算、各病棟での主な疾患での薬剤の使用方法、病棟配置薬の管理について ●処方解析、持参薬の入力、服薬指導の同行、バンコマイシンのTDM

業務内容		研修期間	研修内容
その他	治験業務	半日	○治験の流れ、検査薬や薬の管理、臨床研究について
	NST		●カンファレンスに参加
	摂食嚥下チーム		●カンファレンスに参加
	精神科リエゾンチーム 緩和ケアチーム		●回診に同行
	ICT		○使用薬剤の動向のついての説明
	DIカンファレンス		●1時間程度カンファレンスに参加 （・感染関連の情報提供について講義を受けた ・瀬野川病院薬剤課業務内容について説明を行った）

※毎週金曜日16時から　病院間のWEBミーティング（所属長、研修薬剤師、薬務課）

交流研修の成果

- 当院で不足している部分及び双方でも効率化しづらい業務を知ることができた
- 疑義照会や問い合わせ業務の記録方法が参考となった
- 他施設の処方せん様式、調剤システムの採用基準などを知ることができた
- 専門病院での様々な疾患に対するガイドラインや薬剤師のアプローチについて学べた

- 県立広島病院の精神科病棟には、当院の入院患者とは基礎疾患が異なる患者が多く入院されており、薬の自己管理が多くの患者に行われていた。
- 退院時薬剤サマリーでは、薬剤の中止理由や処方変更内容など転院先が欲しい情報提供内容について具体的に把握できた。
- 県立広島病院は、転院前に情報提供を行っていることがわかったため、転院時の情報共有の課題がわかった。

交流研修の感想

- 業務内容について、十分な知識と経験を持つ薬剤師が研修を受ける方が目的に沿った研修が行えると感じた。
- 当院は単科精神科病院であるが、内科疾患も併存していることがしばしばある。専門病院での様々な疾患に対するガイドラインや薬剤師のアプローチを学べたことで今後当院で合併症の患者に対し知識を活用できる。
- 一方で、専門科病棟に入院している患者の処方例について説明はあったが、患者指導や医師への処方提案などのアプローチの方法を学ぶ時間は不足していたと感じた。
- 一つの病棟の研修時間が短く、介入した症例のその後のフォローに直接かかわれなかったため、数症例患者を担当して経過を観察できればさらに良かったと思われる。

受け入れた病院としての気づき

- 教育や指導の機会が乏しい当院にとっては、交流研修による薬剤師の受け入れにより貴重な経験が得られた。交流研修中にもかかわらず病棟業務の成果は平常時と同程度の実績を記録した。
- 交流研修事業をきっかけにして双方のさらなる交流の機運が醸成されており、今後の連携深化にも期待が持てる状況となっている。
- 人材交流の機会が続いていくとより効果が出ると思われる。

まとめ

- 研修に出る薬剤師は知識を、残る薬剤師は指導経験を得ることで、業務に対する意欲を向上させる効果が得られた。また、それに伴って施設間の心理的距離感が縮まり、今後の連携や相談がしやすくなる。
- 課題としては特に当院のように薬剤師数が比較的少ない施設においては、研修を受ける側は希望する業務だけを学ぶことは難しい。一方で受け入れる側は、研修当初は業務手順などを教えることに多くの時間が割かれるため、研修期間が十分に取れない場合は上記のメリットを感じられないおそれがある。
- よって、各施設の実情に見合った研修時期や期間の調整が必要と考えられる。